

ひょうご 水百景

No.130 石屋川（神戸市灘区）

～石屋が軒を連ねた川を大量の土石流が襲った阪神大水害～



写真-1 阪急橋梁下を流れる石屋川（令和元年5月）

■ 水無川を山津波が襲う

写真-1 は、阪急電鉄神戸線・石屋川橋梁の下を流れる石屋川を撮ったものです。川といっても、水は全くと言っていいくらい流れていません。少し下流に行くと新田川（にたがわ）が合流しますが、それでも水量は写真-2 のようにごくわずかです。

日頃はこのような水無川でも、ひとたび豪雨に襲われると時として洪水をはけきれない場合があります。ましてやこれに土砂が混じると様相は一変します。

昭和 13（1938）年 7 月 5 日、バケツをひっくり返したような激しい雨が降り続き、神戸の年間総雨量の 1/3 に相当する大雨によって六甲山地の南斜面では多数の山崩れが発生、それが山津波となって市街地に押し寄せました。「阪神大水害」です。



写真-2 令和元年 5 月、平野橋から撮影

■ かつて石材業者が軒を連ねた石屋川

かつて住吉川上流の荒神山から切り出された花崗岩は、石屋川沿いに軒を連ねた石材業者の手で加工され、御影の浜で船積みされて各地に運ばれて行きました。日本のお墓で最も多く使用されている石材である「御影石※¹（みかげいし）」の名は、積出港の名に由来し、河川名も川沿いに軒を連ねた“石屋”に由来しています。

花崗岩採掘の最盛期は大正から昭和の初期で、当時はこの御影地区で採れた石を「御影石」としていましたが、その後、石の産出量が減るなかで、同等の特徴を持つ石を総称して「御影石」と呼ぶようになっていきます。

※1 御影石：マグマが地殻内の深い所で冷えて固まった結晶質の石材で、花崗岩の代表的な銘柄である。硬くて風化に強く、重さもあり、他の石に比べて吸水率も低い。一方、花崗岩は風化しやすいという一面を有し、地表水あるいは地下水によって鉱物が粘土鉱物に変化し、これにより岩石強度が低下する。風化した花崗岩は「マサ」と呼ばれ、これから分離して堆積したのが「マサ土」である。花崗岩山地は崩壊しやすいが、崩壊するのは「マサ」ではなく「マサ土」であり、「マサ」は“腐っても岩”である。

■ 石屋川の濁流による惨禍の跡

大阪朝日新聞の昭和 13 (1938) 年 7 月 14 日から 24 日に連載された記事「復興の街を行く」の中から、石屋川関連の記事を引用・加工して、石屋川沿川の山津波による惨禍の様子を紹介します。

石屋川の濁流に埋められた高羽北側一円の家という家にはぎっしり土砂がつまって、2 階まで閉ざされた人々は、一切の家財道具を残したまま瓦屋根を突き破って脱出。電柱の街灯に手が届くような状況で、屋根がそのまま避難路になった。

北向地蔵横の道路を阪急が横切る一帯は「学童が登校するのに線路を横断するようでは危険だから」とわざわざアンダーパスがつくられたが、それがすっかり土砂で埋められて、小学生たちは線路の上を横断して登校している。

住田を中心とするこの一帯は新築住宅ばかりだったため流失・倒壊家屋は少なかったが、土砂が 2 階まで流れ込んで、屋根から出入りしている人々が少なくない。

この一帯における被害状況は、寺口、鷹匠、住田付近は 600 近い家屋が埋没し、寿、竹丸、老松※2、徳岡方面の一部にも埋没した家が少なからずある。

主な被害家屋としては、県公舎 11 戸流失、3 戸半壊、奥村邸（通称あかがね御殿）半分埋没、一王山（いちのうさん）温泉半分流失である。このような大きな被害が生じた直接の原因としては、以下の 4 点が考えられる。

- ① 石屋川の県公舎附近における決壊
- ② 一王山の新池の決壊
- ③ 十善寺付近での氾濫
- ④ 阪急高架線の盛土部が土石流を堰き止めた

※2 寿、竹丸、老松：楠丘町の小字

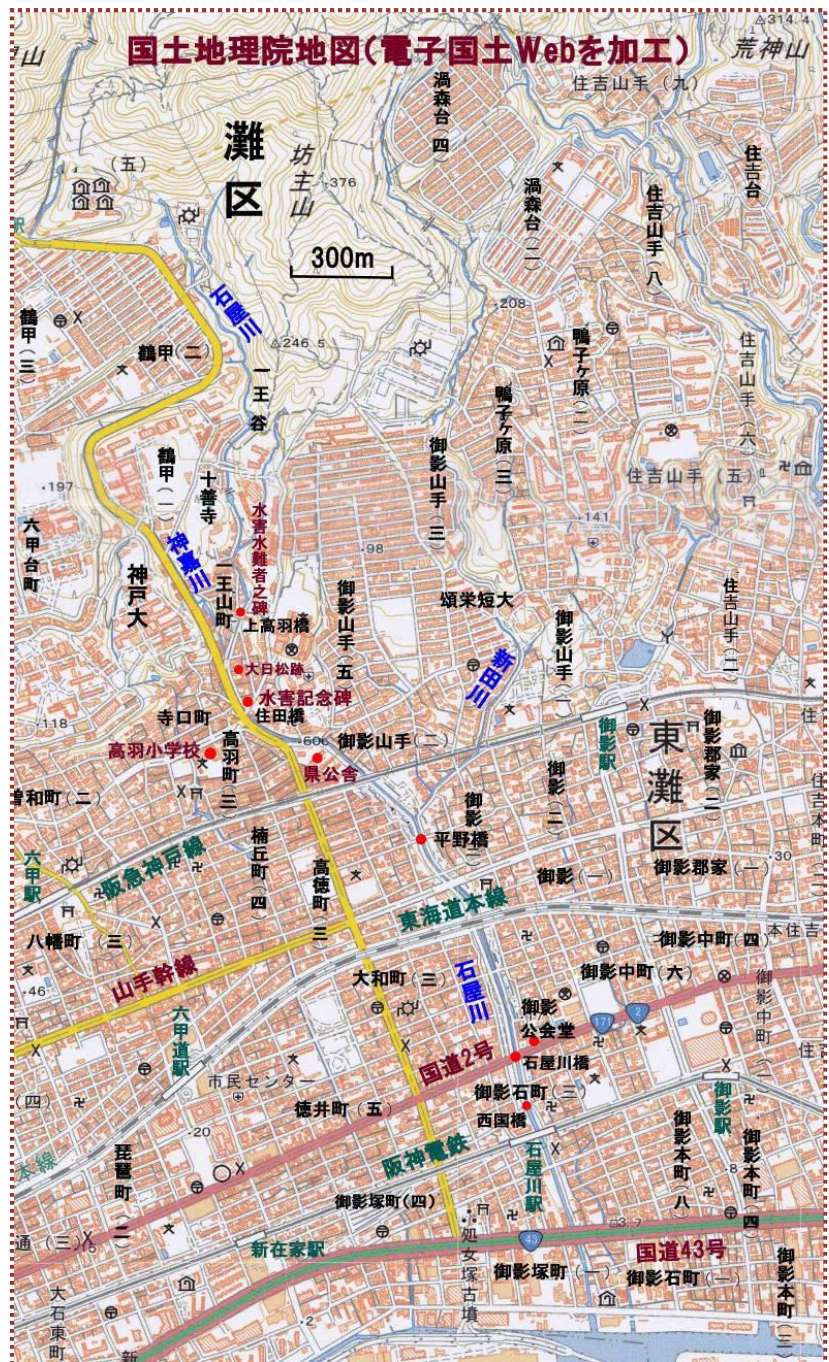


図-1 石屋川沿川の地図

■ 石屋川沿川の復旧～土石と流木の堆積層との闘い

昭和 14 (1939) 年 6 月 16 日から 29 日に神戸新聞に連載された神戸市復興部長・富田恵四郎氏の回想記事(「神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫」に収蔵)から、石屋川沿川の復旧に向けた闘いの様子を引用・加工して紹介します。
(現代文に書き換え、かなり加工させていただいている)

石屋川は平常時はほとんど水のない川である。そして、国道 2 号から新田川合流点までは天井川であり、東海道線は石屋川の下(現在は上)を通過している。

昭和 13 (1938) 年 7 月 5 日の午前 9 時半頃、上流溪谷の山崩れによる土砂や流木が濁流となって押し寄せ、高羽小学校北東部の堤防が決壊、高羽小学校東側一帯の家屋を 20 尺(≒6m)近く埋没させ、多数の死傷者を出した。これによる浸水面積は 62 万 m²、堆積土砂量は 186,500m³に達した。土砂といってもほとんど小石と数千貫に余る石と流木が流れに揉まれ、あるいは折れ、あるいは裂け、ささらの如くなって 20 尺(≒6m)近くもギッシリ水締め^{※3}されて家屋を埋没させたのである。

7 月 7 日、この決壊箇所一帯を数条の小川となって高羽小学校の方へ流れている水を元の川筋に戻すため、神戸商大(現・神戸大学)、第三神港商業、灘中学などの勤労奉仕団の応援作業と千人近くの人夫を動員して作業に取りかかったが、炎熱は砂原に反射して一層烈しく、加えて現場に到達する道路が全部土砂の山であるため材料を運搬するのも容易なことではなかった。叭(かます:穀物・石炭・肥料などを入れる、わらむしろを袋状としたものなどの)に砂を入れて両岸に土嚢を積んで仮堤防をつくり、川の掘り上げを敢行するのだが、石と流木の堆積層を切り抜ける程困ったものはなく、これでは新しく川をつくるのと変わらない。鉄筋コンクリートの橋梁は、破壊しないと橋の下に密着している流木・土石が搬出できないのでハンマーで破壊した。

7 月が終わり 8 月が来て、川の形が整ったと思った直後、8 月 2 日夜来の猛雨によってまた元の河原に戻り、血の滲む苦心の作業が水泡に帰してしまった。しかし、幸いにしてこの雨による被害は新区域には及ばず、かつ流出したものはほとんど砂だけであったため、作業を再開してから相当能率も上がり、両岸には流出してきた石を割って石垣を積み、石が不足する場所は板柵工を施工する等仮堤防の築造や川の浚渫・底張と不眠不休の猛作業は 9 月末に到ってついに実を結び、10 月になって一応川としての復旧はできた。

阪急電鉄軌道の上下一帯は、膨大な量の土砂の処分をどうするのか相当論議されたが、結局市としては道路を元どおりに復旧する事となり土砂除去工事に取り掛かった。この工事の進捗とともに埋没した住宅も復旧することが決まり、宅地内の土砂を道路へ搬出した。

1 年後現地を見ると、家屋もすっかり建て替えられて面目を一新しているものの、まだ除去できていない民有地の土砂は道路の両側に切り立った砂の層をなし、地上から 20 尺(≒6m)近くある法面に所々草が生え風になびいているのを見た時、当時を思い浮かべ人間の力は自然力にはかなわないが、また力強いものであるとしみじみ思った。

※3 水締め:土砂の転圧または埋め戻しなどの場合に、散水をして締め固めること。砂に有効であり、シルトが多くなるに従って効果が薄くなる。

■ 阪神大水害を伝える

石屋川沿川にも阪神大水害に関係する石碑が 2 ヶ所にあります。

① 「水害記念碑」

この「水害記念碑」は阪神大水害から 1 年後の昭和 14 (1939) 年 7 月に建立されたもので、元は神嘉川(かみかがわ)合流点の南の地にあった巨大な老松「大日松」の根本近くに、大日如来を彫った石仏とともに鎮座していました。老松は昭和 55 (1980) 年にマツクイムシにより枯死し、残された石碑と石仏は阪神淡路大震災後の整地の際に移設され、石碑は桜ヶ丘町の住田橋左岸道路脇に、石仏は鷹匠中学校の西にある北向地藏尊傍に。

石碑の文字は、当時の神戸市長・勝田銀次郎によるものです。石碑の立つ住田橋付近から県公舎にかけて石屋川が左にカーブしており、土石流が急勾配の川を流れ下ってきて、このカーブしている箇所を曲がり切れず右岸堤防から氾濫したと思われます。



写真-3 住田橋近くにある『水害記念碑』

昭和拾参年夏連日豪雨七月五日に至り石屋川並に高羽川決壊し濁流氾濫土砂堆出す為よ死者数名傷者多数を出だし流失家屋貳拾余埋没家屋数百に及ぶ
嗚呼水害此の如きは斯地に於て曾(かつ)て見ざる所なり
治水の法忽(ゆる)がせにすべからず記して以て後昆※4に告ぐ
昭和拾四年七月建之
高羽町会

記念碑背面の碑文

※4 後昆(こうこん)：後の世の人、子孫。

② 「水害水難者之碑」

この2基の石碑は、灘区一王山町の上高羽橋右岸付近にあります。「水害水難者之碑」の文字の左には、「昭和33年7月5日」の日付と石碑を建てた方の個人名が刻まれています。石屋川に流された人の霊が夢枕に現れたという夫婦が、21回忌に建てたそうです。



写真-4 石屋川に架かる上高羽橋



写真-5 上高羽橋右岸付近にある2基の『水害水難者之碑』

■ 「神戸市百年の大計」をめざした復興計画

災害直後の7月、県知事や国・県の関係機関、学識経験者、関係企業などによる神戸市復興委員会が設立され、第1回委員会において会長に就いた神戸市長・勝田銀次郎は、「本市復興百年の大計を樹立し、再び今回のような惨事を繰り返すことなく」と復興の決意を述べています。

出来上がった復興計画では、六甲山の砂防事業、河川改修、河川沿川道路・山麓道路の整備、公園の新設などが盛り込まれました。砂防は直轄事業となり、河川改修は県と市で分担することに。

石屋川は、河口から県公舎北端までの2.25kmと、左支川の新田川は、合流点から御影町大仏原地先までの0.6km、合計2.85kmを改修することになり、堆積した大量の土砂を取り除き、床止工によって急勾配を緩和、河床を掘り下げて河積を拡大し河床を石張りにします。土砂の処分先は、昭和12(1937)年に策定されていた「神戸港東部拡張に関する埋め立て計画」に基づき、東部埋立地の造成に活用されました。

なお、復興事業は昭和14(1939)年に開始されましたが、間もなく戦時体制下で事業の多くが縮小・中止に。



写真-6 東海道本線下流の石屋川

■ モノローグ

『大地に刻まれた災害史』の最後に以下のような記述があります。

「平穏な時期が長く続くと人々の記憶も薄れ、災害が起こったことを忘れがちになります。一中略一 災害を経験したことのない人々へ災害の恐ろしさを正しく伝えていくとともに、防災に対する心構えを自分自身への教訓としたものです。大地に刻まれた災害の痕跡から何を学び、何を伝えていくのか。それは、私たちに与えられた課題でもあります。」

最近、地球温暖化の影響もあって、平穏な時期が長く続くことはなく、ほぼ毎年のように豪雨災害や土砂災害が起きています。「正常性バイアス※5」という言葉があります。「自分のところだけは大丈夫だ」といった何の根拠もない楽観が尊い命を失うことにつながっています。

被災者の話の中に、「雨の音が大きくて防災無線が何を言っているのか聞き取れなかった」という声を聞きますが、そんな激しい雨が降っている状況下で、身の危険を感じることなく避難行動をとらないのはなぜなのでしょう。

というより、そのような状況下ですでに避難すること自体が危険な状況になっています。自分が住んでいる地域の危険性を理解して早めの避難を心がける必要があります（難しいけれど）。

※5 バイアス (bias)：傾向、偏向、先入観、思考や判断に特定の偏りをもたらす思い込み要因、得られる情報が偏っていることによる認識の歪み、といった意味で用いられる。「認知バイアス」は心理学の用語で、人間の判断・認知・意思決定などにしばしば紛れ込む恣意的な傾向を指す。たとえば、災害が生じ身に危険が迫っている状況下において、多くの人は何となく「自分は助かるだろう」と思ってしまう。結果として逃げ遅れ、命を落とすような事態につながる。この「自分は大丈夫」と考える認知バイアスは、特に「正常性バイアス」と呼ばれる。



写真-7 沢の井



写真-8 沢の井 (亀がひなたぼっこしている)

【参考資料】

- 1 『大洪水復興の苦心』 神戸市復興部長 富田恵四郎 神戸新聞 昭和 14 年 6 月 16～29 日
- 2 『御影石について』 一般社団法人「全優石」(全国優良石材店) HP <https://www.zenyuseki.or.jp/buy/granite.html>
- 3 『深成岩の特性とその見方』 斜面防災対策技術協会 HP <https://www.jasdim.or.jp/gijutsu/ganseki/fujita/index.html>
- 4 『新修神戸市史・行政編Ⅲ都市の整備』 神戸市 平成 17 年 3 月
- 5 『大地に刻まれた災害史』 神戸市教育委員会 平成 26 年 10 月
- 6 『ふるさとの川紀行』 神戸新聞総合出版センター 平成 21 年 7 月
- 7 『六甲山の地理』 田中眞吾編著 昭和 63 年 7 月
- 8 『大日松の大日如来』 『神戸・昼から散歩』 HP <https://hirukarasampo.blog.fc2.com/blog-entry-4752.html>
- 9 『バイアス』 実用日本語表記辞典

「沢の井」の由来

阪神電鉄・御影駅の高架下にある霊泉。神功皇后が朝鮮半島から凱旋、ご参拝の途中この泉でお化粧を召された際、水面に皇后の御姿があざやかに映しだされた。これが「御影」の地名の起源と伝えられており、その後いつの頃からかこの霊泉を「沢の井」と称し里人が水を汲むようになった。(現地の説明板から引用・加工)

※発行：令和 3 (2021) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.130

改訂：令和 8 (2026) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.130